

# 第33号 華山会報

平成26年11月1日

公益財団法人華山会

## 田原市民の拠りどころとして

愛知県美術館長 村田 眞 宏



東日本大震災が発生して三年半ほどが経過しました。岩手、宮城、福島を中心とする被災地は、地域の状況に応じて復興に取り組んでいます。多くはまだ道半ばといったところだと思えます。大震災発生直後から、被災者の救出や生活支援をはじめとして、さまざまな領域での救援活動が展開されてきました。そのなかで文化庁の呼びかけで組織された「東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会」が中心となって、地震や津波で被災した文化財の救出、いわゆる文化財レスキューが行われました。この活動を通じて救出された文化財は、全国各地の専門機関などで応急処置が施され、安定的に保管され、元あった博物館などに帰る時を静かに待っています。しかし、未だに応急措置が済んでいないものもありますし、福島第一原発事故の周辺地域では、ようやく救出作業が終わった段階というものもあります。

なぜ、このように被災文化財を救出することが必要なのでしょう。それは文化財や文化遺産は、地域に伝えられた記憶であり、人々の心の拠り所だからです。例えば、大きな被災を受けた地域で、道路や水道などのライフラインが復旧し、そこに人々が戻ってきたとして、それで復興が遂げられたといえるでしょうか。いや、それだけでなく、その地域に伝えられてきた文化財が博物館などに戻り、さらに寺院や神社なども日常を取り戻し、そこに伝えられてきた儀式やお祭りなども行われるようになって、はじめて復興は確かなものになったと言えるはずです。

文化財や文化遺産が有する意味の一つに、それが有形か無形にかかわらず、地域の人々のアイデンティティの拠り所として機能するということがあります。それらは災害の時というより、むしろ日常のなかで共有され、その地域のアイデンティティが形成され、伝えられていくべきものです。その意味で、田原市民にとって渥美半島の歴史や風土、とりわけ渡辺華山の存在はかけがえのないものです。それを今という時代と社会状況のなかでどのように共有し、守り、伝えていくか、その努力と実践の積み重ねに田原の将来がかかっているはずです。公益財団法人華山会の顕彰活動や田原市博物館のふるさと学習に資する展示活動、調査研究活動と博物館友の会・ボランティアガイドなどの市民と協働の活動がその原動力となっているのです。



渡辺華山記念碑（博物館北西）

渡辺華山先生の歩いた道

田原市議会議長

金田信芳

文政十三年（一八三〇）四月十三日から天保四年（一八三三）三月六日にいたるまでの渡辺華山先生の日記『全樂堂日録』は、個人所蔵で、愛知県文化財に指定されています。断続的に記録された日記の中味は、文政十三年に藩主、三宅康直に随行した日光行きに伴う日光街道のスケッチが有名です。この日記の時期は、華山の代表的な紀行日記『游相日記』『毛武游記』『訪謁録』『参海雜志』などに重なります。また、天保三年には江戸詰の年寄役に就任し、藩重役として多くの功績を残しています。この中に、天保四年二月一日から「已下客参録」と書かれ、田原の景色のことが書かれ、この地域の江戸時代の様子がわかる部分があります。

※以下、地名には波線を引きます。

二月五日の条に  
御城をはなれ、セイヤ橋をわたり加地（治）といふ所に出づ。これハ松の並樹ありて左右皆畑なり。土色朱

（の）ととし、六田（加治村）といふあたりハ皆火色をなす。草木も生得ず。黒川原（現大久保町）といふハ縦横凡二十町もあるべし。皆稚松なり。いかにして生立ぬやといふに、松葉かきとりて薪とすれば生木せぬよし。北は蔵王、藤生（尾）山々見ゆる景よし。ゼンゴの橋として船倉橋に出る川（汐川のこと）の源なり。水甚深し。この地川まれにてかゝる小溝も皆名あり。大草村と高松とに、北ハヒルハ原とて昔論地ありし所に、今ハ荒野となれり。これハ野田村といふ村と赤羽根といふ村との間にある地なりしが、むかし清右衛門といふこゝろあしきもの、田原へ移封の時悪事をエミ出し、境に炭を埋て証とし論をおこせしなり。其公裁ハ林とすれバ野田のもの、畑とすれバ赤羽根の地と定められしよし、いとひがごととなり。今ハ両村意地になりて稚松だにおかずといふ。憂ひのひとつなり。この原を通り富士見の茶屋（現高松町内）とて憩ふべき家あり。人々と小酌す。赤羽根の浜に出づ。天気晴朗、いと興あり。こゝに遠見番所とて異国船の往来を見出すべきために遠眼鏡いだしおかれ、浜役井上平蔵が役所にあり、よびとりて見る。けふハ風波あしければ魚獵なしとて漁翁浜辺にさまよえり。呼て魚の来しを見出すべきよふをきく。凡群れていたるものハ鱒なり。春より来、其あかく紫色を帯り、六月よりハ鯖、四月よりハ石毛チなりとぞ、酒をのませ帰す。これより浜辺をたどり行。波さかまきておそろし。池尻川をわたらんとするに、此地の漁人等到りて済んとす。銭やる。此川浜沙の中をながれて潮ミつる時ハ川幅ひろく渡るにかたし。浜麦といふ草あり、即筆くさなり。又、浜午房（夢）といふものあり、此根甚味アリとぞ。若見、越戸、温鈍ひさぐ家ありとて尋いたるに、亭主あらざとて辞す。又おくまりたる処にひさぐ家あり。老さらばひたる女のひとり住ひ、けふ温鈍の粉はあれども、ゆびさせねバ待玉えといふ。さきいそげバ出行く。此地ハいと暖にして麦茎を抽きて勢ひよし。これハ北の山ちかければ、西風あたらぬをもて、かくなりとぞ。山下の畑に鳴子引こや、そこはかとなく設けたり。是ハ山近く猪いづるをもてかくハせしとぞ。和地村にいたり中田（田中）孫兵衛といふ庄屋訪ひ小酌す。此地海苔を出すをもて製せしものを乞ふ。冬ハ百文に式帖、春にいたれば百文に四帖六帖にも及ぶとぞ。小酌の後こがねくられて立出て、浜に下る。巖きそひ出てしら浪と争ふさま、絵にも筆にも及がたし。こゝに坐してその勢ひをながむ。いとおもしろくお

目次

題字「華山会報」元華山会理事  
故小澤耕一氏

P ① 田原市民の拠りどころとして  
村田眞宏

P ② 渡辺華山先生の歩いた道  
金田信芳

P ③ 目次

P ④ 渡辺華山『毛武游記』⑩

P ⑧ 博物館所蔵品から  
渡辺華山筆

『客坐掌記（天保九年）』⑩

P ⑩ 「少年物語渡辺華山」  
読書感想文について

P ⑭ 華山の田原行（十七）

P ⑯ 公益財団法人華山会  
田原市博物館 から案内



そろしく、日暮くらきをたどり富士見茶屋にかえり、つかれをやしのみ。助十と(いう)百姓の二男江戸の仲間にて、予が家ゆき、せるもの、予が憩ふを見て驚く。いたくつかれにつかれて、予刻ばかり新蔵(田原城新蔵、現華山会館・華山神社が建つあたり)の旅館に帰る。湯を立、まつ。(鈴木)喜六、(鈴木)俊二、(中村)元喜と小酌し、皆々とまる。

二十二日の条に

我手即天下之手 我身即藤薛之幸  
午飯をおはり、俊二(鈴木春山、藩蘭医)、喜六と吉湖(胡)より浦のわたりにいたらんとす。此日風あれど、天晴ていとよし。俊二が旧宅の花を見る。やしきハ三とせばかりさきに火をうしなひてやきたり。ついひぢ所々のこりて、かのいもがかき根ハあれにけりと読出んもかくにや。麦ハ青うしげり、桜ハしろく、椿ハあかく、竹のむらだちたる上に蔵王山秀たるさまいとよし。北来(田原町北荒井)に到らんとす。御城をはなれんとせるに、古溝所々にあり。昔ハ此わたり外郭にて、木戸ハ近き頃迄もありしよし。かたてハあはら(安原崎)の入江、大巖のはな(吉胡の岩が鼻)、北来、田原の田はるかに、山かひハ吉田石養(現豊橋市石巻)の山々見ゆる。このわたりハ早損の

憂愁あれば所々に池を堀(掘)て水を貯ふ、ひとき(は)よし。

蔵王のすそに臥龍新田(旧田原ホテル跡、現たはらゆの里)とて、むかし佐藤氏の住なせし旧地あり。今ハ松生しげり、巖の大きやかなるもの、屋根のむねめきたる楼めきたるものそびえ出で、稚松のむらがりたる梢に山々近く聳たる景より小松の中をつたひ行。このけしきを見て幽邃にたえざれば、やがて浦村に到ん事も打わすれて、滝頭に到んといひ合す。皆胸す松間の径をたどる。蔵王権現ハ黒う繁りていと尊し。原を行き畑を經る。猪のあれたるあとハ麦あはれになりて見苦し。こは人の胸丈に垣穂結たらんにハ此憂ハなきを、人々惰慢にてかくなりとぞ。山々のすそハたゞ小松のミにて、巖かけ落ちたるもあり。此わたりの畑ハ小石多くてあしく、山田ハ沢の中より作りて里に到る。楷子田(棚田)といふ。かの田毎の月(現長野県千曲市の冠着山の棚田にうつる月)もかくにや。きぬがさ山の麓に到る。山左右よりかこみ冷氣を人をうちて寒し。抑滝頭といふハ其名たゞしからず。頭滝ともいハ其名よきを、頭といふハ滝源の沢をいふにや。むかしハ杉林多くありしを、今ハ斧斤に害ひて、月代それるやうになりたり。されバ水ハかれ、滝ハ細うなりてあはれな

りとぞ。此わたりハフロガ谷といふ。滝の右ハ炭やき山、雑木ばかりある所ハ鳥留りといふ。左ハ吹付山といふ。やがて巖の上に坐をすめて、酒をとり出し、三友(華山・春山・喜六)相かたむく。風ハ北風にていとさわし。巖左右より打つ、ミて、いばら、かや、す、き、もろもろの雑木生ひしげりて、瀑二流あり。一者ハ巨石の上をはしり落、一ハ崖にかゝりて白糸のごとし。この糸のごときものを第一瀑とす。やがて第一所に到んとて此巖をすべり下り、石にとり草をからみて径もなき所をようやく瀑のもとにいたれり。先つとし、久津野宇宙(葛野宇仲、赤羽根村の村医)といえる医師、此瀑に槌をもふ(け)病者をうたしむ。石像不動あり。又此医の作りし所とぞ。山上に到、水源を見る。いと滾々たる流なり。むかしハ杉の大木ありしよし、今皆斧に害なハる。加地(治)山の峰に登り御領の内をのぞむ。浦、吉湖(胡)のわたりより大久保、高松のわたり迄見渡さる。

二月五日(田原城出發)和地(御城(現田原町巴江) ↓セイヤ橋(現田原町清谷) ↓加治(現加治町) ↓六田(加治村、現加治町) ↓黒川原(現大久保町黒河原) ↓ゼンゴの橋 ↓大草村(現大草町) ↓高松(現高松町)

↓ヒルハ原(現野田町比留輪あたり) ↓野田村(現野田町)・赤羽根(現赤羽根町) ↓富士見の茶屋(現高松町内) ↓赤羽根の浜(現赤羽根町宮瀬古あたり) ↓遠見番所(現赤羽根町宮瀬古あたり) ↓池尻川(現赤羽根町池尻田) ↓若見(現若見町)、越戸(現越戸町) ↓和地村(現和地町) ↓富士見茶屋(現高松町内) ↓新蔵(田原城新蔵、現華山会館・華山神社が建つあたり)

二月二十二日(田原城 ↓加治)

俊二が旧宅(現田原中学校、田原町椿付近) ↓北来(現田原町北荒井) ↓外郭(現田原町晩田) ↓蔵王のすそに臥龍新田(旧田原ホテル跡、現吉胡町、たはらゆの里) ↓滝頭(現田原町滝頭) ↓蔵王権現 ↓きぬがさ山(現田原町衣笠)の麓 ↓加治山の峰(衣笠山と藤尾山の間の山)

この行程の中で、二月二十二日に浦へ行こうとしていたのですが、蔵王山を見ているうちに行先を変更し、衣笠山の麓を経て、滝頭へ向かいます。私が住む藤七原あたりも歩き、景色を記録しているようです。また、写真も無かった時代に思いをはせることもふるさとへの愛着を持つ一手段となるように感じています。

渡辺崋山『毛武遊記』  
研究会員 加藤克己  
⑩

天保二年（一八三一）十月十六日続き

河原の図（はね滝か。はね滝は、前回（32号）参照）



渡瀬川、上黒川といふ。

渡良瀬川、上流を黒川という。

※黒川 『角川日本地名大辞典10.群馬県』には載っていないが、大間々から足尾にかけての渡良瀬川流域の郷を現地では「黒川郷」と呼んだ。地名辞典に載っている下野国足利郡黒川村（越県合併して、桐生市菱町黒川）とは別。

大間々町の図

図中に、赤城山、道了権現、大間々町とある。



※ 赤城山 第四回（27号）参照。  
※ 道了権現 第八回（31号）参照。

※ 大間々町 第八回（31号）及び第九回（32号）参照。

よに出て濁や渡んくろ川のミなもとときよき流れなりける 季雄

世に出ると濁の中を渡っていくであろう黒川の、源流はきれいな流れであることだ。 季雄  
※ 季雄 高木梧庵。第三回（26号）参照。この歌は、「よに出て」とあるので、人間社会を念頭においていると考えられる。

道了権現と茶店の図

渡辺崋山「毛武遊記図巻」より



道了権現に謁し、茶店に飲す。日暮んとすれば、興半にして出で、桑圃の間を行事凡一里、下野の山の端に月出。

道了権現にお参りし、茶店でお茶を飲んだ。日が暮れようとしていたので、興半ばであったが発して、桑畑の間をおよそ一里（約4km）ほど行くと、（東の方）下野国の山の端に月が出た。

※ **桑圃** 桐生は、製紙業・絹織物業が発達しているので、周辺の農村では養蚕業が盛ん。明治時代の地形図を見ても桑畑が多い。

※ **月出** 往路は渡良瀬川の北東側の道であったが、大間々から天王宿までは南西側を南東方へ歩いたと思われる。十六日の月だから、日没後に東の空に出る。前方に見えたであろう。

山上月図



赤城山火あり、燈のごとし。天王宿に到る。此村四十戸群をなせり。堤定右衛門といふは此村第一の豪農にて、かたはら絹買といふをなりわひとなせれ。家門広大にしてこものも又多く養へり。

赤城山で火が燃えている。まるで灯火のようである。天王宿にやってきた。この村は、四十戸が群れをなしている。堤定右衛門という人は、この村で第一の豪農であつて、そのかたわらに絹織物買次の商売を生業としている。家屋敷も広く大きく、丁稚もまた大勢雇っている。

※ **赤城山火あり** 赤城山は古い火山で、現在まで二万五千年間火山活動を休止しているから、噴火ではない。焼畑農業が行われていたのであろうか、不詳。

※ **天王宿** 上野国山田郡天王宿村（桐生市相生町）。地名は、鎮守八坂神社（天王石宮）から起こったものであるという。当時は幕府領。文政七年（一八二四）の「諸聞書」では、家数八十、人数三百（『角川日本地名大辞典』）。桐生・大間々を結ぶ街道の中間にある村。村名に宿がつき、明治時代の地形図では街道の両側に家が並び、宿場町の形に見えるが、地名辞典には「天王宿村」とあり、宿場の説明はない。本陣や旅宿はなく、茶店程度のものであつたという。なお、地名辞典は「てんおうじゅく」、上毛電鉄の駅は「てんのうじゅく」とある。

※ **堤定右衛門** 生没年不詳。当時の天王宿村の名

主。農業のかたわら絹織物買次商を営む。岩本茂兵衛がかつてここで修行した縁で、華山はここを訪れた。

手振山と赤城山の図

渡辺華山「毛武游記図巻」より

※ 『華山と歩く桐生と周辺の旅』によると、要害山の付近から手振山と赤城山を描いたものという。手振山は、大間々の町の北西にある山。標高三六八m。要害山から見ると、赤城山の手前にある。





定右衛門 七十余  
 妻 七十許  
 養子 六十許  
 実ハ妻の弟  
 孫 妻 四十余  
 曾孫 妻 死

定右衛門 七十歳余り  
 妻 七十歳ばかり  
 養子 六十歳ばかり  
 実ハ妻の弟  
 孫 その妻 四十歳余り  
 曾孫 その妻 死

※ 孫以下は年齢が書いてなく、注も養子についているだけなので、よく分からない。曾孫が妻を持つような年かと疑問を持つが、養子の妻が後妻で、孫は先妻の子であるならば、可能である。

三夫婦打そろひていとめで度家なり。予ゆくりなく訪ひしかば、いとおどろきて懇留す。ふりきりて出づ。門外にうづくまり礼をなす。これハ茂兵衛が養ひ親なり。

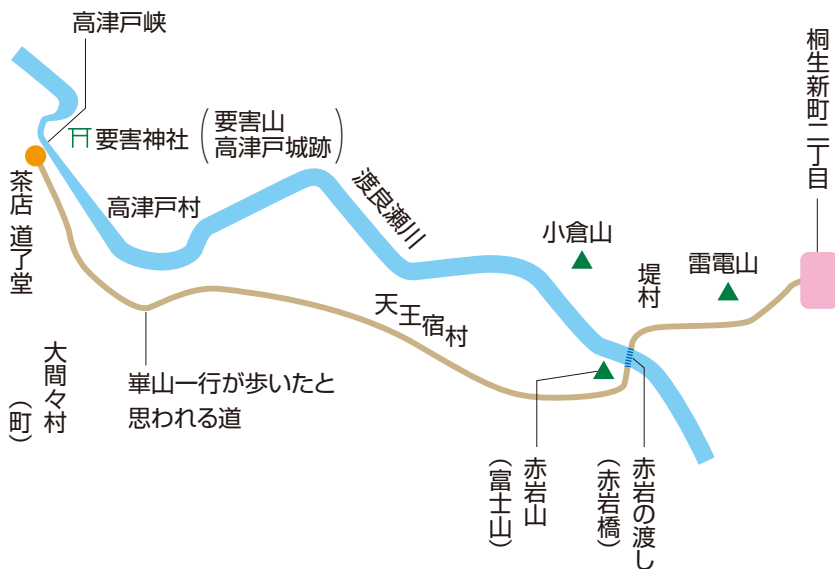
八坂神社(天王石宮)

天王宿村の地名の起源といわれる。



(定右衛門の家は) 三代の夫婦がうちそろって、たいへんめでたい家である。私が突然に訪れたので、(定右衛門は) たいへん驚いて懇ろに引き留めようとする。それを振り切って外へ出た。すると、門の外にうづくまって挨拶をした。この人は

大間々から桐生略図



茂兵衛の養い親である。  
 ※ ゆくりなく 不意に、突然に。  
 ※ 礼 あいさつをすること。  
 ※ 茂兵衛が養ひ親 茂兵衛は一時、堤定右衛門のもとで絹織物買次の修行をしていたらしい。

※ この日の記事は天王宿村で終わっているが、こ  
こから桐生新町二丁目岩本家へ帰ったはず  
である。十月二十九日の記事に、「赤岩橋とて  
冬のほどは橋かけて人馬を濟(わた)す」と  
あり、「毛武游記図巻」に橋が描かれている。  
十六日にはすでに橋がかかっていたであろう。  
この橋を渡って桐生へ帰ったであろう。

十七日 晴

八木橋元恭を訪ふ。本居宣長の歌を見、又出し  
て守部歌と文とを見る。いとよし。守部ハ今江  
戸浅草観音の社の後苑に住み、歌学をもて多の  
おしえ子あるとぞ。むかし武州幸手宿の人にて  
名を庭磨呂と称し、桐生、足利の人多、此門人  
なり。元恭もまた此おしえをうくるとぞ。

十七日 晴

八木橋元恭を訪れる。本居宣長の歌を見て、ま  
た(歌集を)出して守部の歌と文とを見る。たい  
へんすばらしい。守部は今、江戸の浅草観音の社  
の後ろの庭に住んで、和歌に関する学問において  
多くの教え子があるという。昔は武蔵国幸手(さ  
つて)宿の人で、名を庭麻呂と称して、桐生、足  
利の人が大勢この門人である。元恭もまた、この  
教えを受けたという。

※ **八木橋元恭** 一七九六—一八六二。桐生新町の  
医者。橘守部に師事して和歌を学ぶ。

※ **本居宣長** 第二回(25号)参照。

※ **守部** 橘守部。一七八一—一八四九。伊勢出身  
の国学者、歌人。文化六年(一八〇九)、武蔵

国幸手に移住、庭麻呂と称す。桐生・足利に  
多くの門人を得た。文政十二年(一八二九)、  
江戸に出る。古典の解釈において一家をなす。  
宣長の『古事記』推重に対して『日本書紀』  
推重説を説いた。伝説と史実を区分して神典  
を合理的に解釈しようとした。

※ **浅草観音**

浅草寺(東京都台東区浅草)の本尊  
は聖観音黄金像で、浅草寺を俗に浅草観音と  
称す。天台宗に属していたが、昭和二十五年(一  
九五〇)聖観音宗を立て、寺院二十五カ寺、  
末社十八社を率いる総本山となった。

※ **後苑**

家のうしろにある庭園や畑。

※ **武州幸手宿**

日光街道・奥州街道の宿駅。武蔵  
国葛飾郡のうち(埼玉県幸手市)。仲町・荒宿・  
右馬之助町・久喜町・牛村を通称して幸手宿  
と呼んだが、明治七年(一八七四)正式地名  
となる。幕府領。日光街道第六番目、日光御  
成街道第五番目の宿場として、街道沿いに街  
並みをなした。

※ **足利**

下野国足利郡足利町(栃木県足利市)。  
近世には木綿織物産地として発展した。数日  
後、華山は足利に足を運ぶ。

田村金兵衛を問ふ。こは此姉なるもの岩本の母  
が弟の家に嫁せしが、家おとろえ夫死して故さ  
となれば此にかえり、手習ふ事をもて多くのお  
しえ子あり。本此家は絹買商人なるが、金兵衛  
わかき時奢侈なりけるをもて、家ほろび、妹名  
は梶の家かりて、共に此なりわひをなすなり。

田村金兵衛を訪れた。これは、この姉にあたる  
人が岩本の母の弟の家に嫁いだのだが、その家が  
衰え、夫が亡くなって、故郷であるから、この地  
に帰り、寺子屋を開いて大勢の教え子を持つてい  
た。元、この家は絹買商人であったが、金兵衛が  
若い時ぜいたくな生活をしていたために、家が滅  
び、妹(名は梶という)の家を借りて、いっしょ  
にこの生業(寺子屋の師匠)をしているのである。

※ **田村金兵衛**

二代目金兵衛。一七八一—一八三  
九。下久方村(桐生市)で織物買次商を営ん  
でいたが、若い時にぜいたくな生活をしてい  
たために家が滅びてしまった。華山が訪れた  
頃は、妹梶の経営する寺子屋でいっしょに師  
匠をしていた。

※ **此姉**

妹梶と同一人物かと思われるが、記述の  
合わない部分もあり、不詳。

※ **岩本の母が弟**

不詳。  
梶 一七八五—一八六二。金兵衛の妹。「梶子」  
と書かれることが多い。幕府大奥の祐筆とな  
っていたが、文化年間、田村家立て直しのた  
めに帰郷し、林兵衛を夫に迎えたという。橘  
守部から和歌を学ぶ。松声堂という塾を開き、  
子女の教育にあたった。華山が記す姉と同一  
人物だとすると、林兵衛とは再婚ということ  
になるが、不詳。

(続)

田原市博物館所蔵品から 渡辺崋山筆「客坐掌記（天保九年）」⑩



（図）  
山水

（図）  
山水



（図）  
山水

（図）  
山水





(図) 山水

万竿烟雨

乙未小春倣王洽\*

澆墨書法\*

(図) 山水

王洽（？～八〇五）、歴代名画記  
作王猷、善澆墨山水、時人故謂  
之王墨。（中・90）

澆墨書法 唐の王洽に始まった  
山水を描く法、多く雨景を描く  
ときに用いられ、水墨をはね散  
らして描く。



(図) 山水

(図) 山水

## 「少年物語 渡辺華山」

### 読書感想文について

公益財団法人  
華山会では、郷  
土の偉人渡辺華  
山先生の功績を  
後世に伝承する  
事業の一環とし  
て、毎年市内小



学六年生に対し、「少年物語 渡辺華山」の冊子  
をプレゼントしてまいりました。感想文の募集  
を行ったところ、百四十六件の応募をいただき  
ました。

この中から優秀賞に選定されました六点の作  
品をご紹介します。

応募いただきました学童の皆さんやご協力を  
いただきました各学校の先生方々に厚くお礼申  
上げます。

公益財団法人華山会事務局

### 見習いたい華山先生

田原中部小学校 六年 高久ひなの

たゆまぬ努力と、多くの人への思いやりの心を大切に  
した華山先生。世の中の人のためになる生き方をした華  
山先生についてこの本から学び、時代は違うけれど、私  
には何ができるのだろうかと考えさせられました。

一番すごいなと思ったところは、私と同じ十二才の若  
さで志を立てたところです。華山先生は十二才のとき、  
日本橋にて、備前池田侯の若君の行列にぶつかり、はず  
かしめを受けました。相手が自分と同じ年頃の若君であ  
るのを見た華山先生は、

「あの若君は、生まれつきがよいばかりにあのような。」  
と、身分の違いでどうも違うのかと、くやしさがこみ  
あげてきます。そして、殿様の上で立てる学者になろうと、  
この時決心をしました。時間をおしはず勉強し、なんぎ  
なことや悲しいことにあつても自分をふるい立たせまし  
た。華山先生は、家の者を幸せにする、殿様の上に立て  
る立派な人になるという強い気持ちがあつたからです。  
十二才の私には、ここまで強く立派な志は、まだ立てら  
れません。悲しいことがあつたら、くじけてしまいたいそ  
うになることもあります。華山先生はその後、その志に  
たがってたゆまぬ努力をし、病気がちな父親にかわつて  
家族を支えながら勉強にもはげみ、立派な人格をつくり  
あげていきました。志をしっかりと全うするところもすご  
いと思いました。

華山先生の、学問や絵の先生、一緒に勉強していく仲  
間との出会いもすばらしかったと思います。華山先生の、  
いったん思い立ったらどんなにしてもやりとげる気持ち、

困っている人や苦しんでいる人たちの役に少しでも立  
とうとする気持ち、その強い気持ちにうたれて、周りの人  
や仲間も協力して動いてくれました。私は、華山先生が  
立派な人だから、周りにすばらしい人たちが自然と集ま  
ってきたのかなあと思いました。

華山先生の考え方は、他の人より一歩進んでいました。  
先の先まで見とおし、田原藩や日本のことを深く考えて  
いました。人民のための報民倉の建設を提案し、田原藩  
の改革を進めたのもその一つです。私は、広い視点で世  
界を見つめ、たくさんのことを勉強し、日本の未来を考  
え続けた華山先生は、とてもすごいと思いました。でも、  
そのことを分らない人たちによるでたらめなうわさが  
広まり、殿様に迷惑がかかることを恐れた華山先生は自  
刃してしまいます。それでも、人や世をにくむような言  
葉はひと言も残さず、大きな心で責任をとった華山先生。  
私は本当に立派な人だなと思いました。

華山先生のように、自分のことではなく、周りの人や  
家族のことを一番に考えて行動することが、今後私には  
できるだろうか。とても考えさせられました。少しでも  
近づくことができるよう、がんばっていききたいです。

### 華山先生の生き方を見習って

田原中部小学校 六年 横田 蒼典

ぼくは、学校の夢育活動で華山先生について学びまし  
た。学習する前は、学芸会で華山劇を見るだけで、華山  
先生がどんな人か全然知りませんでした。

この「少年物語渡辺華山」を読んで、華山先生がどん  
なことをして、どんな人であったのか分かってきました。

華山先生は、学者や画家、家老として活やくしただけではなく、人としてとてもすばらしい人だと分かりました。毎朝早く起きて勉強をし、いつも働き者で、家族思いな優しい人だと書かれていました。

どうしてこんなにならなければならないのだろうと思っているのと、華山先生にとつて忘れられない出来事があったことが分かりました。それは華山先生が十二才の時に、病気の父の薬を買いに出かけた帰り道で、大名行列の先頭にぶつかり、武士達から暴行を受けたことです。殿様が自分と同じ年ごろであったことに、華山先生はとてもおどろきました。同じ年ごろなのに、生まれがちがうだけで立場やあつかわれ方がちがうなんておかしいと感じました。その時のくやしさが、学者になって、殿様を教えることができる先生になろうという志を立てることにつながりました。それから華山先生は、ねる時間を少なくしてまでも勉強をしました。

ぼくは今、この時の華山先生と同じ年です。ぼくと華山先生を比べてみると、ぼくはくやしき思いをして、次はがんばるぞと思ってもなかなか実行に移すことができません。何をどうすればいいか分からなくて、何もしない時があります。ただ毎日をいつも通りに送っていると思います。だから、華山先生のように自分の目標を持って、行動に移せるのはすごいことだと思うし、その強い志におどろきました。

また、華山先生は、天保のききんで田原の食べ物がないことを予想し、報民倉を建てました。そのおかげで、田原では死者が出ませんでした。華山先生がいなかったら、死者が出ていたと思います。ぼくだったら、自分や家族のことで頭がいっぱいですが、華山先生は田原の人々のことを考えてくれました。華山先生の先を読むと

いう姿勢が田原を救ってくれたのです。華山先生が偉人と呼ばれる理由が分かりました。

ぼくにも、自由に使うことができる時間があります。華山先生は、目標や周りの人のために時間を使い、今でも尊敬されています。

この本の中に華山先生の「見よや春大地も亨す地蟲さへ」という言葉があります。土の中の小さな虫でも、熱心に努力をすれば大地をつき抜け、思いどおりに動ける時が来るという意味です。ぼくも、夢に向かって地道に努力することが大切だと教わりました。そして、自分の夢をかなえるために、一日一日をもっと大切に過ごしたいです。

### 少年物語渡辺華山を読んで

童浦小学校 六年 岡本 莉奈

本にのっていた華山先生像を見てまず思ったのが、まじめそうな人だなあとということでした。そして、読み進めていくうちに、すごく尊敬できる人だということが分かり、感心しました。

今の私たちの時代に、華山先生ほどたゆまず努力し、くじけず、親によく任せ、勉強にはげみ、立派な人格をつくり上げている人がどれだけいるだろうかと思わずにいられません。

今の時代は、私も含めて、一人で解決しようともせず、親のいうことを聞いたり聞かなかったりで、勉強もそこそこで自ら努力するというものも少ないで、「わからん。」を口ぐせのように言うだけで、調べることもせず、そんな人が多いような気がします。

なんだか自分が小さく思えます。もつとやれることがあるのではないか？華山先生の話を読み、そう思いました。

華山先生は、貧しい家庭に育ち苦勞を重ねたんだなあと思いました。でもその反面、出会う人に恵まれ、とても幸運だったと思いました。それは、華山先生のためにも努力が幸運につながったのだと思います。

華山先生の父定通は、「どんなえらい人でも、困ってしまふことがある。へばい人はなのおさら困ることが多い。だから、その時、心をみだしてはいけない。」という言葉を残しました。その言葉に、私はうなずけるものがありました。

華山先生も父のその言葉があったからこそ、そして、父の死を経験したからこそ、その言葉を胸にきざみバネにして、努力と勉強をおしまなかつたのだと思います。そんな華山先生がすごく尊敬できます。

でも一つだけ華山先生の生き方で疑問に思うことがありました。それは、自ら命をたつたことです。これから悪いことが起きるからといって、皮ふ病にかかりみんなに迷惑がかかるからといって、自らの命をたつただけは、やってはいけないかと思えます。あとに残された人の気持ちを考えないといけないかと思えます。

自分はそれで終わりだからいいけど残された人は、どうして助けてあげられなかったのか、どうして分かってあげなかったのかなど、ずっと引きずって悩んでしまうと思います。

いろんなことを思い考えさせられた一冊でした。田原にも日本を代表する偉人がいた。

私も華山先生のように、たゆまない努力を重ね、立派な人間性をつくり上げたいと思いました。そして、広く



世界の人々と仲良くし、美しい郷土とゆるぎない平和な国の建設に少しでも役立てる人になれたらいいなあと思っていました。

### 少年物語渡辺華山を読んで

童浦小学校 六年 牧野新平

華山先生についてあんまり知らなかったのですが、この機会があつてよかつたと思います。

まず、渡辺華山先生について知ったことは先生の家が貧乏でも負けずになんばった人だということです。お父さんは田原のどの様のけらいで、江戸のおやしきに勤めていました。華山先生（登）は、十一人の大家族であり、さらに父が病気で、寝こんでしまつていて、とても貧しく、生活に苦しんでいました。また、田原藩は、日本でも小さく、貧乏な藩で、給料も少なかったと聞いたことがあります。

登が十二才のころ、街中を駆けていたら、岡山藩の大名列とぶつかつてしまいました。そこには同じ年くらいの若との様がかごに乗っており、登をたたいて、通りすぎて行きました。登はその時、こう決意しました。

「大学者になろう、との様に敬われる人になろう。」と思ひました。とても悔しい思いをしたのだと思ひます。その決意がすごいなと思ひました。今はありませんが、ほくも華山先生のように大きな志を持たれたらと思ひました。

華山先生は子供のころすごくつらい思いをしました。八人兄弟の長男であり、お父さんが病氣なので兄弟のほとんどが養子や奉公に出され家族みんなバラバラになり

ました。その時のようすは、田原中部小学校の学芸会で演じられていたそうです。また、お父さんの代わりに田原藩のおやしきに、お手伝いに行き、大人と一緒に仕事をしていたようです。ほくだつたらとてもたえられないと思ひます。

大学者になろうと決意した、華山先生ですが、絵の才能を認められ、貧乏な家を助けるために、寝る間も惜しんで絵を描き続けました。華山先生の絵は最後まで細かく描かれ、特に人物画は、その人の性格、人がらまで伝わってくるように思ひます。また、田原に帰つてきた時にかかれた絵で田原城の絵や、ほくの家の近くのかさ山から見た、トヨタの自動車工場の方面を見て描いた絵は、とても、華山先生を身近に感じます。あさりせんべいの包みの「一掃百態図」は、江戸時代の人の生活がよく分かります。

家老となつた華山先生は、日本一の蘭学者と言われていた、小関三英や高野長英と仲良しになり、尚齒会と言う西洋の事の勉強会を作りました。その当時の日本は鎖国をしていて、外国の情報は一切入つてきませんでした。となりの中国では、外国によるしんりやくが始まつていました。このままでは日本はあぶないと、先生は慎機論を書きました。日本のために書いた本ですが、ばく府には、目をつけられてしまいました。華山先生は、とても不運な時代に生き、現代だつたら、もっと力を發揮していたと思ひます。

華山先生は捕まり、取り調べが始まつたのです。一じきは無罪だとばく府はかくしんしたが、慎機論のせいであつ居の刑が下されました。田原でのちつ居の刑が下されてから、華山先生は、一そう絵に打ちこみました。しかし、華山先生は田原藩の三宅のどの様や家族に迷惑を

かけたことに責任を感じ、池の原で、自害をしてしまいました。

華山先生の行なつたことは、のちの日本に大きなえいさようをあたまました。

不幸な環境や、不運な一生ではあつたけど責任感が強くがんばり通した人だと思ひました。まだほんの少しの知識ですが、今後も華山先生の、行なつたことについて勉強していきたいと思ひます。

### 田原市のほこり

清田小学校 六年 花井美森

私は、少年物語「渡辺華山」を読んで、とても尊敬できることがいくつもありました。

一つは、人のためにつねに行動しているところです。華山先生は、武士の家でありながら、殿様からいただくお給金が少なくなつたうえに、つぎからつぎと弟や妹が生まれたことや、お父さんが体が弱くて、お医者さんにかつたり、薬を買つたりしなくてはなりません。家の中の道具は、どうしても無ければくらしにくい。なべや釜のほかは何もありませんでした。冬の寒い時でさえ、お母さんはふとんもなく、着のみ着のままです。つめたいやぶれだたみの上にねなければなりません。このように幼いころからとても貧乏だつたにもかかわらず、人が困っている時は自分のことのように考え、自分の着物をぬいで人にあげて、自分はぼろ着物を着ていたり、ききんの時は、三ばいのごはんを二はいに減らして困っている人にあげたりしていました。魚屋が商売出来なくなつた時は、お金を集めてめぐんであげました。

お札に魚をもらった時も、魚を買ってから魚を返して「これを売って明日のもとにきなさい。」と言われました。私だったら三ばいのご飯を二はいにすることは出来ると思うけど、気に入っている服は絶対にあげることは出来ません。華山先生は、貧しい人や困っている人にとってもやさしい人で、不平等をきらい、正義感が強い人だと思えました。

もう一つは、とても勉強家だということです。当時の日本は、徳川幕府が政治をとるようになってから、長い間、外国とお付き合いせずに過ぎてしまいました。そのため外国のことはさっぱりわからず、外国の文化がすぐく進んでいることを少しも知りませんでした。蘭学者たちは外国のようすがよくわかっていましたから、日本が非常におくられていて、とうてい外国に勝てないことを心配していました。蘭学者たちは、「早く外国の学問や武器を研究して、日本のためになるものがあれば、どんな取り入れて、日本の力を強くしなければならぬ。それには、まず国を開いて、外国とお付き合いすることが大切だ。」という考えを持っていました。その考えは、そのころの日本では、とても新しいものでした。そして華山先生は、蘭学者たちのリーダー的存在でした。きっと、華山先生は、だれよりも頭が良い人だったんだなと思います。華山先生は毎日の時間割をきめていました。朝四時におきて六時から本を読み始め、それから剣道をして、体をきたえます。十時から人は人にたのまれた絵を描いたり、絵の勉強をしたりする予定を立てて実行されてきました。私だったら予定を立てても、とちゅうで予定通りに行かなくなつてあきらめてしまうので、そんな華山先生にとってもあこがれます。

最後に自殺されたのは、とても残念ですが、華山先生

は、すばらしい画家であり、かしくてやさしい人だと思えました。そのような立派な華山先生がこの田原市に時代がちがっても生きていたことを、私はとてもほころに思いました。

## 渡辺華山について

衣笠小学校 六年 山本 穂香

「押し入れから出てきたんだけど。」

と、おばあちゃんが見せてくれたのは、すみで描かれた岩とランの花でした。もう一枚、文字だけで書かれた掛けじくもありました。

「立と小華の書だよ。」  
と教えてくれました。

立と小華は、渡辺華山の息子だそうです。華山の名前を聞いたことはありませんが、詳しくは知りません。地味だけど、きれいだなと感じたその絵や書を見ているうちに、画家でもあった父親の華山のことを、もっと知りたくまりました。

華山は、子どものころ「虎之助」という名前でした。虎之助は、生まれてから一週間も目があきませんでした。お母さんは悲しみのあまり、どうしてと背中をたたきました。すると不思議なことに目があいたそうです。お母さんは、とてもうれしかったと思います。

虎之助は小さな時から絵がうまく、何事にも熱心でした。おやしきに行くようになると「登」という名になりました。昔は成長するにつれて、名前をかえることがあたり前だったそうです。登という名は、お殿様からいただいたものです。

登は学問も一生けん命続けましたが、家が貧しかったため、絵を勉強してそれを売って暮らしを支えようと考えました。今、重要文化財に指定されるようなすばらしい作品を残すことができたのは、小さいころから、苦勞して勉強を続けてきたからだと思いました。

また、大人になった華山は、田原藩の人々のために、報民倉をつくりました。これは人民のための倉という意味です。報民倉のおかげで、田原藩の人々はうえ死にする人が一人もいなかったそうです。

現在、田原市では、華山にならって報民倉をつくり、そこに災害に備えてお米や水をたくわえています。二百年も前の華山の教えが、今でもずっと続いていることに、すごいなと感じました。

そして、華山は日本全体のことを頭において、一歩進んだ考えをもっていました。西洋の学問を学んで、西洋の事情を知ることが日本のためになると考え、「慎機論」を書きました。ところが、それがもつて、華山はつかまつってしまったのです。

自分のことよりも、日本全体のことを考え、未来のことを心配していた華山なのに、どうしてこんなひどいことになるのかと、悲しくなりました。

華山が自害した池の原公園に行ってみました。何回か来たことはあったけど、家族のことを心配しながら亡くなった華山のことを考えると、やっぱり悲しくなりました。自害する時に書き残した文には、罪人にされたことや人をうらむようなことはひと言もなかったそうです。

私が住んでいる田原に華山の名のつく神社や会館があるのは、華山が人々のために努力し、つくしたからだと思います。

# 華山の田原行（十七）

二月二十日

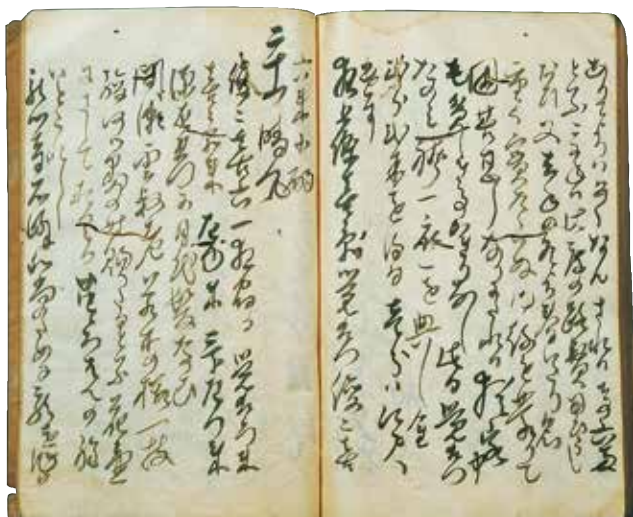
この日、華山はスイセンの絵を描きます。「此地此草多し。」と田原にスイセンが多いことを記しています。何のために描いたのか記されていませんが、次に今回の旅の旅費について記しているので、収入を得るためだったのかもしれない。

「予こたび此地へまかる命ありて、往來の路費金六兩を玉ふ。その他ひとひらの金も玉らず。こハ御儉法御行ひありてよりハかくなん。」

今回の田原行で藩から六兩の旅費が支給されたようです。

当時、お伊勢参りの旅費として、江戸から伊勢の往復が二十四日で四兩かかったという記録が残っています。これからすると、一日の旅費として六〇〇文（一兩＝四〇〇〇文）ほど必要だったわけです。旅籠の相場が二〇〇文、昼食五〇文として、草鞋、川の渡し賃等考えていくと、庶民の旅で、一日四〇〇文は必要でした。

『全樂堂日録』天保四年二月二十日



華山の今回の旅は、一月二十二日から二十九日の七泊八日。帰途も同日数と考えて合計十六日。そうすると、一日あたり一五〇〇文。華山は、武士なので単純に庶民の旅と比較はできませんが、庶民の四倍近くの額となり、豪華な旅に感じます。しかし、道中、「この日もこ、ちあしけれバ輿を下らず。」（二十三日）「風祭といふ所にて輿より下る。」（二十五日）という記述があるように、駕籠での旅と考えられます。また、本稿の第二回（会報第一八号）で述べたように、何人かは分かりますが、従者もいたようなので、六兩という額は、

決して多い額とはいえません。旅費六兩のほか滞在費等は支給されず、本稿第一回から第四回で記したように田原に来るまでにそんなに浪費をしたわけでもないのに、「されバその六兩といふこがねハ、此度の路費用ひうしなひ、」というように往路で消費してしまつたようです。「御儉法御行ひありて」という理由を別にしても六兩は、少額だったようです。

「御儉法」とは、本稿でたびたび述べてきた藩財政再建のために出された儉法のことです。天保元年（一八三〇）の「向う三カ年間格外改革儉約令を出し、田原家中宛行上下すべて二人扶持（江戸は年寄七人扶持）部屋住一・五人扶持」とする。（会報第二十三号）がこれにあたります。このことは、天保三年五月十二日の『全樂堂日録』に、「前は庚寅歳、撰佐藤半助等十数人行新法、以儉刻欲、猝有余無不足。折人禄、年寄七口、用人六口、其下準之。」とあります。庚寅は、文政十三年＝天保元年のことです。新法が儉約令のことです。

この日の『全樂堂日録』には、華山が年寄役に任されたことも記されています。

「予、以蔭擢年寄職、賜禄百石職費米二十石。例君上自命之。年寄川澄又次郎、用人市川茂右衛門、八木仙右衛門侍坐。固辞不拜。川澄氏頼曰可拜。不得止受之。」（予、蔭を以つて年寄職に擢ん



でられ、禄百石職費米二十石を賜る。例により君上自らこれを命ず。年寄川澄又次郎、用人市川茂右衛門、八木仙右衛門侍坐す。固辞して拝さず。川澄氏頻りに拝すべしという。やむを得ずこれを受く。

藩側が華山に年寄役を勧めた理由として、同日の記述に、「及今年其法大弛弊。又欠負向千両。是以在其職議論紛興。佐藤氏称病不出。川澄亦病臥不起。廨舎寂然無人。」（今年に及び、その法大いに弛弊す。また、向う千両を欠負する。是を以つて其職にあるもの議論紛興す。佐藤氏病と称し



『全楽堂日録』天保三年五月十二日

て出ず。川澄また病臥し起てず。廨舎寂然として人なし。」とあります。

儉約令は天保二年には成果があり、「田原藩家中へ年末恵金一五二両二朱（田原藩家老一両二分）足軽二分・江戸二両一分三分」と餅米若干を給す。」（会報第二十三号）となったのですが、天保三年には、千両の負債を負ってしまっています。そのため、どう対処すべきか意見がまとまらず、病気を理由に役所に人がいなくなってしまう。そこで、華山に藩財政を立て直すということと白羽の矢が立ちました。

若い頃から藩内を刷新しようと計画していた華山にとって（『退役願書之稿』参照）藩政は決して無関心のものではなく、どちらかといえば出世もでき、名譽なことなのですが、最初は固辞します。

年寄役就任は、華山にとってストレスだったのでしょうか。就任後、鈴木春山へ出した手紙にも、「僕事不図蒙冗位、日夜戦々罷在候。」（僕図らずも冗位を蒙り、日夜戦々と罷りあり候。）と、年寄役に選ばれたことで日夜戦々恐々としていると述べています。

あるいは、年寄役に就任することにより忙しくなり、絵を描く時間が減ると考えたのでしょうか。事実、年寄役に就任してからの華山には、紀州藩

の難破船の問題や助郷の問題が起こり、その対応に追われるようになります。

今回の二月二十日の旅費の記述の後に、「又去年の冬より春いたり、名重く実たらハぬ御役を蒙りて困苦甚うなりにたれば、猶客中も貧しき事かぎりなし。」と「名重く実たらハぬ御役」（年寄役）就任後、生活が苦しくなったと述べています。実際、年寄役により、名目は百二十石となるのですが、儉約令により七口の収入しかありません。

しかし、川澄又次郎の勧めにより、年寄役就任を受諾します。その後の華山の活躍については、本稿で述べてきた通りです。

華山は、天保二年九月二十日から十二月三日まで、「游相日記」「毛武游記」の旅に出かけているので、その間の記述は『全楽堂日録』では省略されています。帰藩後、「訪貳録」の執筆等で忙しかったのか、『全楽堂日録』に十二月四日の記述の後、次の頁に「天保二卯年」とだけ記し空白があり、別の丁に「天保壬辰五月十六日」とだけ記し空白があります。何のためにこうしたのかは謎です。しかし、それ以上に謎なことは、「天保壬辰五月十六日」の次の丁に、年寄役のことを記した五月十二日の記述があることです。（続）

研究会員 柴田雅芳

公益財団法人華山会  
田原市博物館  
田原市渥美郷土資料館  
からのご案内

博物館企画展のご案内

十二月六日(土)～二月一日(日)

**企画展** 渥美線 渥美半島と外界をつなぐ鉄路の物語(企画展示室一・二) 展示解説 十二月十四日(日)・十一月十一日(日) 午後一時三十分～(一般向け)・午後三時～(鉄道が好きな方向け) 当館学芸員補 木村洋介

博物館講座

廃線・未成線跡 ツアー 一月十八日(日) マイクロバス使用 食事代等実費(要申込)

渥美線沿線めぐり 詳細は広報等でお知らせします(要申込)

同時開催…渡辺華山と椿椿山(特別展示室)

華山と椿山は師弟であり、最も親しい友人でもありました。重要文化財なども展示します。



開業当初の渥美線電車と三河田原駅

平常展のご案内

十月二十五日(土)～十一月三十日(日) 渡辺華山名品展(特別展示室)

華山愛用品や作品を展示。渡辺華山筆客坐掌記(重要美術品)、秋草小禽ほかを展示します。

郷土の先人華山・磯丸(企画展示室一) 華山が磯丸について書いた石竹図などを展示。

田原藩(企画展示室二) 三宅家が田原藩主になって三百五十年目を迎えます。市指定文化財などを展示。

展示解説 十一月八日(土) 午前十一時～ 当館学芸員

二月七日(土)～四月五日(日)

華山十哲(特別展示室) 華山の代表的な弟子は華山十哲といえます。福田半香、井上竹逸、斎藤香玉なども展示します。

ひな人形と初凧展 企画展示室 田原の旧家に伝わったひな人形や田原凧保存会制作の初凧などを展示します。

期間中スタンプラリーを開催します。常設展示室では渡辺華山の生涯を展示しています。

民俗資料館では田原の暮らしを中心に展示しています。

渥美郷土資料館・赤羽根文化会館展示室でも所蔵品を展示しています。

観覧料

企画展

一般 四〇〇円(三三〇円)

企画展開催時は小・中学生無料 ※企画展は常設、特別展示室のみ観覧の方は二一〇円(一六〇円)

平常時

一般 二一〇円(一六〇円)  
小・中学生 一〇〇円(八〇円)

( )内は二十人以上の団体料金

休館

毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)、展示替日、十二月二十八日～一月四日、民俗資料館は博物館開館日の金土日曜日と祝日は閉館します。

渥美郷土資料館企画展のご案内

十月二十五日(土)～十二月七日(日)

**企画展** 生誕二百五十年 糟谷磯丸 まじらない歌の世界(企画展示室) 展示解説 十一月三日(月・祝) 午前十一時～ 当館学芸員

二月一日(日)～三月十五日(日)

**企画展** 第29回ひな祭り展

(公財)華山会から  
華山・史学研究会会員募集中

申込場所 華山会館事務室  
毎月第四土曜日研究会  
視察研修(年一回)に参加できます。

華山会報 第三十二号

平成二十六年十一月一日発行  
編集発行 公益財団法人華山会

理事長 鈴木 愿  
常務理事 菰田 稀一  
事務局長 讃岐 俊宣

〒四四一―三四二一  
愛知県田原市田原町巴江二二の一  
TEL 〇五三二・二二・一七〇〇  
FAX 〇五三二・二二・一七〇一

編集協力

田原市博物館  
華山・史学研究会

吉川利明 山田哲夫  
林 和彦 別所興一  
林 哲志 中村正子  
小川金一 柴田雅芳  
加藤克己 中神昌秀  
石川洋一 小林一弘  
増山禎之 磯部奈三子  
池戸清子

※華山会報ご希望の方は華山会館・田原市博物館にお申し出ください。次回発行予定 平成二十七年四月十一日